

脳障害児が、漢字を覚えて、こんなに変わった

この脳障害児に会ったのは、ただ二回だけです。最初は、四十九年七月、初めてこの子の家を訪れ、両親に指導法を教えた時、次は、それからおよそ八か月ほどたった日のことです。

最初の印象では、暗い表情というよりもむしろ無表情で無口な子でした。ところが、次に会った時には、見違えるほど明るく、豊かな表情で、目も生き生きとしており、母親にしきりに話しかけ、時おりにこっとする笑顔が印象的でした。

その日の私の日記には、「〇〇で〇〇氏親子に会う。〇子ちゃんは驚くほど良くなっていてもう少しの努力で常人となり得ることを確信す」と誌されていて、その時の様子は今もはっきりと思い浮かべることができます。

この間の父親とのやり取りの記録(手紙)は、すでに月刊“幼児開発”(財団法人・幼児開発協会発行)に、“ある父親の手紙” 脳障害児の記録 として発表しましたので、詳しいことは省きます。ただここで、皆さんに知って頂きたいことは、この子の情緒が、漢字を覚え

ていく過程で、次第に安定していった、ということです。

例えば、「それまでは、時々かんしゃくを起こしていたものだが、それが我慢できるようになった」こと。「病気で診察を受ける時、二人がかりでないと受けられなかったのに、聞き分けができて、一人で受けられるようになった」こと。……などがあります。

指導一年半後の父親の手紙には、「“赤頭巾ちゃん”の絵本を一日に二、三回続けて読まされて閉口している」こと。「赤頭巾ちゃんのお父さんはどうして出て来ないの」「お婆さんが前のページでは眼鏡を掛けているのに、ここではなぜ掛けていないの」などしきりに質問するようになった、など著しい変化が見られる、と書かれています。